

明の爲努力したが、各項目とも未熟なものであり、今後、このされた課題に対し一層の努力を重ねたいと思う。

〔三十二年卒業〕

以上

「あはれ」「をかし」の一考察

東 矢 頼 子

一、

枕草子、徒然草については色々先学に於て研究され、今更いまでもないが清少納言、兼好が同一対象物についての様な観察描写をしているか。それを先ず、「あはれ」、「をかし」に現れた同一対象物について比較、考察してみようと思う。

方法として、

(一) その初めに枕草子、徒然草に於る「あはれ」、「をかし」の用例数からその頻度数(神佛、自然人事)をみる。

(二) 対象物別の表をもとに、同一対象物の観察描写の相違を検討する。

1 その際、特に徒然草の「あはれ」、「をかし」の用

研究テーマの前面に、大きく押し込まれた類多の目録

一方の枕草子と異なる二例について、それが混用か、観察態度の相違かを考える。

2 対象物別(神佛、自然、人事)について、各々検討する。

二、

(一) 「あはれ」、「をかし」の総数及び分類表

徒然草	枕草子	あはれ %	をかし %
38	87	0.31	0.32
40	448	0.33	1.69

註、百分比は日本文学体系の本文の頁数による、

枕草子 一 二六五頁

徒然草 一 一一九頁

底本

改稿枕草子通解

金子元臣 著

徒然草(角用)

今泉忠義 著

(四) 分表類

人事に関し たもの		自然に関し たもの		神佛に関し たもの		
徒	枕	徒	枕	徒	枕	
23	37	10	42	5	8	あはれ
0.61	0.43	0.26	0.49	0.13	0.09	%
28	312	7	123	5	13	をかし
0.69	0.75	0.21	0.25	0.1	0.03	%

(イ) の表から考えてみると、枕草子によく宮廷文学といわれると共に、「をかし」の文学であるともいわれる如く、(イ)の表を一見してもわかる様に非常に「をかし」の用例が多い。この様に「をかし」の用例数の著しく多いのは何故か。岡崎義恵氏は、「態度が批判的、客観的で心情の明朗自由を許すという点に於て隨筆と「をかし」との結合が見られるわけであろう」といわれ、森景南氏は、それを清少納言の躁鬱性性格によるといわれる。しかし、それ

と同時に彼女の生きた時代、生活環境（貴族生活）等もその影響をなすものであろう。

(ロ) の表は対象物別に分類したものである。枕草子の「をかし」の総数四四八例中、人事に関したものが三二二例（〇、七五％）。その中、宮廷内の事に関したものが二二六例（〇、七〇％）をしめる。これは作者の宮廷生活という生活環境によるものといえよう。又徒然草に於て神佛に関する頻度数が枕草子より多いという事は、隠遁生活者たる兼好にとつては当然であろう。

(二)「あはれ」、「をかし」に現れた同一対象物の観察描写について、

(1) 徒然草に於る「あはれ」、「をかし」は混用か、それとも兼好の観察態度の相違か。

「あはれ」、「をかし」に現れた同一対象物を調べているうちに、徒然草に於て、「あはれ」、「をかし」の用い方が枕草子と異なる二例に気づいた。文章から、或は、情景から判断すれば、「あはれ」とすべきを「をかし」とし、「をかし」とすべきを「あはれ」としているのである。以下枕草子と比較しながら考えてみる。

(イ) 野分のあした

枕、野分の又の目こそ、いみじうあはれに覺ゆれ。立

藪、透垣などの伏し並みたるに前裁ども心苦しげなり。

を清少納言の蹊鬱性性格によるといわれる。しかし、それ

徒、又野分のあしたこそを、か、し、け、れ。

いひつゞくればみな源氏物語、枕草子などにことふりたれどおなじ事、また今さらにはじともにもあらず。(19)

(四) 元旦のさま

枕、正月一日はまいて空の気色うら／＼とめづらしく霞みこめたるに、世にありとある人は姿かたち心殊につくろひ、君をもわが身をも祝ひなどしたるさま殊にをかし。(3)

徒、かくて明けゆく空の気色、昨日にかはりたりとはみえねど、ひきかへめづらしきこゝちぞする。大路のさま、松立てわたして、はなやかにうれしげなるこそ、またあはれなれ(19)

まず(4)からみるに、枕草子では野分の翌朝を「あはれ」とし、徒然草では「をかし」の対象としている。野分の吹いた翌朝は、その疾風のため木々は吹き折られ、庭の様も一変してみじめになつた日であらう。当然この日は「あはれ」を催すのではなからうか。清少納言はこの日の「立藪や透垣、草花が倒れている状態に「あはれ」を感じている。しかし兼好はこの「嵐」の吹いた翌朝に「をかし」と感じているのである。

次に(四)であるが、枕草子は、浮き／＼した嬉しい元旦の情景に「をかし」と感じている。それは「あはれ」の対象

にはなり得ないだらう。しかし徒然草はどうか。「はなやかに嬉しそうな感じがする様子」が「あはれなれ」というのである。この様に「あはれ」、「をかし」を用いているのは何故であらう。

野分について考えるに、清少納言は直接はその嵐の吹いた翌日の惨憺たる光景をこまかく観察描写している。しかし兼好はその情景のいかなる点を観察したか、その文章からは判断出来ないが、彼は「野分のあした」をある一定の間隔をおいて、傍観的に、才三者としておゝまかに観察したのではないだらうか。それ故、「あはれ」と感ぜず、「をかし」と感じたのではないか。

(四)の「元旦の様」も兼好の観察態度によるものではなからうか。富倉徳太郎氏が、「兼好の人生観はまず人生の現実として、無常を観じる事がその根底となる。しかし彼がとくのは必ずしも佛教の教える無常観をものゝ高唱ではない。彼は人生の現実として無常の敵、即ち死が念々に我に迫っていることも認識せよと説くのである。」(類纂評釈徒然草)といわれる如く、又、松尾聰氏が「兼好は四季の風物に対して、これを無常という立場から見つめることをなつたのであつた。」(国文学才二卷徒然草の風物描写)といわれる如く、兼好には無常観がその人生観の基盤となつていたのであるが、その無常観が「元旦の様」をも「あはれ」とい寄せたのであらうか。

それとも兼好は、「あはれ」、「をかし」を混用したのであらうか。

もののあはれは秋こそまされと人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今一きは心もうきたつものは、春の気色にこそあめれ。(徒19)

と文章から考えれば、兼好は「春の気色」を「あはれ」としてうけとつている様である。しかし中世の人の心としては、春の気色は当然「をかし」とうけとるのが普通であろう。ではこの「あはれ」は「をかし」の混用なのだろうか。松尾聰氏は、『この「物のあはれは秋こそまされと人毎にいふめれど」という切出し方は、「今一きは心も浮き立つものは」と「春の気色」を限定しながらもやはり「物のあはれ」を「春において見よう」としている。そうして「その春の花に物のあはれを感じるのはあくまでもそれを変化流転の相に於てとらえているからである。」といわれるのである。なるほどその様な兼好の無常思想を基盤としたものの観方をすれば、この「あはれ」はもちろん、「大路のさま……」の「あはれ」も混用とはみられない。しかし「春の気色」にさえ、「あはれ」と感じる兼好が、「あはれ」と感ずべき「野分の朝」に「をかし」と用いたのはおかしい。それに。六月の比あやしき家に……蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月被_また_ををかし。(徒19)といっているが「……また……」と来た場合、またの上の語が

「あはれなり」であれば、これに続く語は「あはれなり」とすべきだという事も考えられる。又

露霜にしほされて……独寝がちにまどろむ夜なきこそをかしけれ。(徒3)

といっていることから考えると、「野分の朝」の「をかし」は表現上の混用ではないかと思われるのである。そこで私には、「①は表現上の混用とも思われるが、②は無常観を基盤とした観察をしている結果だと思われるのである。

(2) 対象物別について検討する

④ 神佛に関するもの

佛に関するもの	神に関するもの		あはれ %
	徒	枕	
徒	5	0	0
枕	1	1	0
	3	2	8
	0.6	0.38	0.4
			0.62
			をかし %

同一対象物を検討する前に、この表について少し考えて

C (兩) (二) (ハ) (四) (イ)

人事に關した
野分のあした
梅 柳 露 月

元旦の すぎし 友のこ 手紙の 祖先の 笛先紙 酒の死 宮廷内 話争物 論争物 車争物 娑婆有 接物待 出人法 説来事 男女間 歌詩物 事	3	2	1	4	1	1	6	4			4	5	2		1	枕	あはれを	
	4	2	1			1						2	1	1	1	1	徒	かし
	29	16		46	14	08	19	8	5	9	9	11		1	枕	あはれを		
	2	1	1	2	1	2	1	1	5	3	3	2		徒	あはれを			
歌の 舟草 音樂 絵画 香具 玩器 舞を 歌を 場を 訪問 道所 芸人 生観 一活 先般 宮内 び延 鐘の 泥棒																		
																枕	あはれを	
				2	2	3									徒	あはれを		
	1	1	4	1	7		2	1	10	4	3	1	2	3	3	2	2	1
												1				1	徒	あはれを

- ④ 元旦の様
③ 子供
② 歌
① 手紙
② 香
③ 笛
④ 車
⑤ 物
⑥ 男女間の事
⑦ 人物

最後に整理してみると、およそ次の様にならうかと思う。

1. 枕草子に於る「をかし」の頻度数が徒然草より圧倒的に多いが、それは清少納言の性格的にも、宮廷生活という環境的にもよるものと思われる。

2. 徒然草に於る、(イ)「野分のあした」の「をかし」、(元旦のさま)の「あはれ」は一概に混用であるとは断定出来ない。

「野分」の場合は、表現上の混用とも思われるが、「元旦のさま」の場合は作者の無常観を基盤とした観察態度の結果だと思われる。

3. 神に対するものについて、「あはれ」の対象としてないのはそのとらえた対象が、信仰から全く離れた、単なる行事、或は古歌との聯想による故、及び当時、

3	2	4	29	2	泥	棒
---	---	---	----	---	---	---

神事に関するものには「めでたさ」、「をかしさ」、「なまめかしさ」は感ずるが、「あはれ」は感じなかつた故だといえる様である。

4. 神佛、自然、人事に関するもの全体を通して、その観察描写をみるに、

枕草子は、一つの対象を写すにしても極めて精細に、具体的に観察し、宮廷生活圏内ではあるがかなり広範囲にわたつて観察描写している。しかしその観察は部分的、外面的なものを中心とし、思考が単純である。又細かいもの、小さいものに美を見出す点、徒然草と特に異なる。徒然草は、枕草子よりおまかで、抽象的であるがその物の内面性にまで深く観察し、人に感じ、考えさせる複雑なものが流れている。枕草子より情緒豊かな面もあり、静的である。特に異なる点は、古典的趣味—平安朝への憧憬—を根底とする観察描写や評論、及び兼好の人生観である無常思想がその根底に流れていることといえよう。

この様な枕草子、徒然草の観察態度の相違は性格的にも、生活環境的にも、時代的にも、性別的にも影響されるものなのであろう。

〔三十二年度卒業〕

単なる行事、或は古歌との聯想による故 乃し

向性（性格）と家庭環境との関連

吉 田 ヤ ス

向性というのは本来、人格の基本的エネルギーの方向をさすもので外向性・内向性の二つの面がみられる。外向性とは外に向つて発散されやすいもの、内向性とは心の中に閉じこもりとするものである。従つて外向性の極端なものは気分が外に発散されるから、向性が明るく細かいことをよく／＼しない。その代り考えがだまかで確実でない欠点がある。内向性の極端なものは、すべて自分の心の中に問題を持ちこむので用心深く、石橋をたゞいて渡る確実な性格である。がその反面小さい事にもこだわり、陰気度人を疑いやしい面がある。

これらの向性の現れ方はいろいろで最も重要なものとして、社会的向性。思考的向性。失敗感（劣等感）。神経質。感情変易性という兒童の随意的傾向の支柱となる五つの向性を定め、これから五つの偏差値を求め兒童生徒の向性面を表わし人格を理解しようとするものである。

社会的向性とは実際の社会生活にそれがどう現れるかをさす。

思考的向性とは考えの上での向性は必ずしも行動として